

望観天 気天

スギの山元立木価格と木造ビル

森林所有者が立木のまま販売する際の価格（山元立木価格）は、1980年をピークに下落し、2010年代にスギの立木価格は1立方尺当たり2500円を割りピーク時の9分の1となった。ウッドショックで一時的に値上がりしたものの、それも束の間、元のポジションに戻りつつある。

昨年の暮れ、林野庁に来られた80歳代の森林組合の組合長は「若かったころ山1反の木を伐れば、家族が1年間暮らしていけた」と語った。組合長が成人して間もない1960年のデータをみると、スギの立木価格は7000円を超えていた。当時の大卒初任給は1万3000円なので、1反の立木材積を40立方尺とすると大卒初任給20カ月分の収入になった計算になる。今はというと、大卒初任給の半月分くらい。山持ちがすなわち金持ちである時代は過ぎさったのである。

戦後造林した多くの人工林は利用期を迎えている。しかし、森林所有者が伐採する気にならなければ、森林資源の循環利用は進まない。わが国は既に人口減少局面に入っている。山における資金循環を増やしていくためには、住宅分野での技術開発や素材生産の低コスト化も重要であるが、これまで木材利用の少なかったオフィスや商業施設分野での需要開拓が欠かせない。

最近、東京の中心街で、木造ハイブリッドの高層ビルが増えてきた。大手ゼネコンの木造建築技術の進化の成果でもあるが、木材の購入による地域経済への貢献のほか、構造材での木材利用が地球温暖化対策としての炭素貯留となること、森林整備への資金還流が生物多様性確保、国土保全や水源涵養にもつながることに、時代に敏感な経営者の皆さんが気づき始めたからだ。木造ビルそのものが環境面に配慮する企業であることを具体的に示している。もちろん、無機質なオフィスより、木質の内装のほうが気分が落ち着く。従業員や顧客も企業の姿勢を評価してくれるだろう。これから木造ビルや木造建築物が街の中に増え、山に活気が戻ることを願う。



青山 豊久
林野庁 長官

あおやま とよひさ
1965年岐阜県生まれ。東京大学法学部卒業。88年農林水産省入省。林野庁を振り出しに、高知県梶原町役場などに出向。林政課長、大臣官房秘書課長、総括審議官、技術会議事務局長、農村振興局長などを経て、2023年7月から現職。